

ロータリーの復興を 中国に呼びかけたい



大阪南 平井常次郎

有能なる新会員の増強、希望多き新クラブの結成こそ、ロータリー発展のための至上至高の要請であると信じているが、ここにひとつの驚きというのはR I本部が去る一月三十一日限りでアフガニスタン、ビルマ、キューバ、ラオスおよびベトナムの五カ国におけるロータリーに対し加盟資格を喪失したという理由で絶縁を宣し、この五カ国に在った六八のロータリークラブが消えてしまったことである。資格喪失については例えば例会を久しく開かないとか、人頭分担金を納めぬとか、奉仕活動を停止しているとかいろいろの場合が考えられるが、今度の場合その原因はもつと根元的なものでこれら各国の政治政体によるもののように想像せられるのである。この報を耳にして反射的にわたしの頭にひらめいたのは台湾のロータリーである。まだ急なことではないであろうが将来台湾が中国本土と合体した日、社会主義国とか共産圏ではロータリーの存在が認められないということになるのではないかという懸念である。いま台湾は二つの地区に分れて七〇くらい

のクラブがあるようだが、どのクラブも奉仕活動に極めて熱心であり、日本のクラブと姉妹関係の縁結びをしているところが非常に多い。日台相互に会員の親善親交や彼我会員ならびに家族の交流が繁く行なわれ、現に米山記念奨学生の数も多く文字通り国際理解の増進と友好に大きな実績を挙げているのである。もしこれが今度の五カ国の場合と同じような悲運に遭うとすれば、日本のロータリアンの精神面に受ける影響もまたかなり深刻なものがあるであろう。

ところが昨秋、日中両国間に友好条約が締結されて以来、両国民間における親睦活動は著しく燃え上がってきて、政治経済のみならず文化、教育、芸術のあらゆる方面で老若を問わず両者の接触は急角度に上昇している。何千年という長い歴史に結ばれた交流に思いを致すとき、たとえ現在の政体政情がどうあろうと、この盛り上がった新しい傾向はむしろ当然であろう。

中国では戦前ロータリークラブ（扶輪社）が拡大され、北支では北京、天津をはじめ七クラブ、中支では上海、漢口以下一三、南支には広東、福州など八、合わせて二八ものロータリークラブがあつてそれぞれに奉仕活動を展開していた。そこで日中友好増進のこの機会に中国には扶輪社再生の素地が十二分に潜在していることと感ずるのは果して無理であろうか。わが国でも戦時中たしか昭和十五年から九年間にわた

ってロータリーは中断していた。しかしこの間においても東京ロータリークラブは毎週水曜クラブとして、また大阪クラブでも金曜会と名づけて毎週一回の会合を楽しみ、その他のクラブでも同様にロータリー時代の会合をつづけたところが多かつた。そして戦後R Iに復帰後の発展は真に目ざましいものがあり、今や世界第二の、いな見方によれば世界第一の大ロータリー国に発展しているのである。今やわれわれは温かい手をさし伸べて心から中国における扶輪社の復興を呼びかけたい。ただR I本部がこの問題をどう考えるか、ということが気にかかるところであるが。

（民間放送）